

第4回 日本臨床薬理学会 中国・四国地方会を終えて

徳島大学病院 臨床試験管理センター

楊河 宏章 武智 研志 中馬 真幸

会期：2019年7月6日（土）

会場：徳島大学蔵本キャンパス大塚講堂（徳島市）

会長：楊河 宏章（徳島大学病院臨床試験管理センター）

テーマ：種を育てる

1. 開催概要

第4回日本臨床薬理学会中国・四国地方会を2019年7月6日（土）に徳島市で開催した。中国・四国地方会は、これまでは交通の便が良く参加者が集まりやすい岡山市で開催されてきたが、世話人会等での議論を経て必ずしもこだわらないこととなり、主催者の勤務地である徳島市での開催とした。また会期も昨年度は国際薬理学・臨床薬理学会議（WCP2018）との関連で12月であったが、今回は通例通り6-7月の開催をめどに、7月6日（土）とした。

内容としては主催者が担当している臨床研究を主として取り上げ、「種を育てる」をテーマとして、シーズから実用化までの流れを再認識し、今後我々が進むべき方向性を考える場を提供することを目標とした（Table）。具体的には「種」に関する研究者の情熱を主眼に特別講演を企画した。加えて多くの因子が必要であるとの観点から、シンポジウムについては研究自体の適正性を再考する意味で第1テーマは「適正な臨床研究推進のために」、研究には体制整備が不可欠であることから第2テーマは「種を育てるための体制」とした。

さらに、2つのシンポジウムの間にポスターセッションを設定し、「種を育てる」にはそれぞれのステップに関与する現実的な取り組みが欠かせないことから、お互いの顔が見える中で、日常の業務に直結するような有用な情報交換の場も提供したいと考えた。ポスター発表の演者を対象として「優秀演題賞」を設定したことも今回の特徴である。

2. 特別講演

地方会は、徳島大学特命教授/国立病院機構宇多野病院院長の梶 龍児先生による特別講演「ALSの治療薬医師主導(死亡)治験」でスタートした。梶先生は難治性神経疾患

Table 第4回日本臨床薬理学会中国・四国地方会プログラム

13:00	開会挨拶
13:05-14:00	特別講演「ALSの治療薬医師主導(死亡)治験」 座長：梅本 誠治（広島大学病院総合医療研究推進センター） 講演：梶 龍児（国立病院機構宇多野病院長、徳島大学特命教授）
14:00-14:10	休憩
14:10-15:10	シンポジウム1「適正な臨床研究推進のために」 座長：島田 美樹（鳥取大学医学部附属病院薬剤部） 武智 研志（徳島大学病院臨床試験管理センター） 1) 研究者とともに歩む～支援・管理経験からの提案～ 近藤 智子（山口大学医学部附属病院臨床研究センター） 2) 研究倫理コンサルタントとその育成 中馬 真幸（徳島大学病院臨床試験管理センター） 3) 研究公正とその考え方 伊吹 友秀（東京理科大学理工学部）
15:10-15:40	休憩、一般演題ポスター発表
15:40-17:10	シンポジウム2「種を育てるための体制」 座長：永井 将弘（愛媛大学医学部附属病院臨床研究支援センター） 丸本 芳雄（山口大学医学部附属病院臨床研究センター） 1) シーズ開発に向けた四国 TLO の活動 矢野 慎一（徳島大学研究支援・産官学連携センター） 2) 鳥大発医療機器開発の挑戦 ～地域の企業とともに取り組む新しい医工連携 古賀 敦朗（鳥取大学研究推進機構研究戦略室） 3) 特色を生かした治験・臨床試験の実施 ―スケールメリットとボーダーレスな研究の取り組み 三邊 武彦（昭和大学医学部薬理学講座臨床薬理学部門） 4) シーズ実用化のための研究支援実施体制 ～岡山大学病院の場合～ 櫻井 淳（岡山大学病院新医療研究開発センター） 5) 指定発言・臨床薬理研究振興財団とその活動 金田 豊正（公益財団法人臨床薬理研究振興財団）
17:10-17:30	優秀演題賞発表 表彰式 閉会挨拶 次期会長挨拶
17:30	終了

著者連絡先：楊河宏章 徳島大学病院臨床試験管理センター 〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町2丁目50-1
TEL:088-633-9294 FAX:088-633-9295 E-mail:niseko@tokushima-u.ac.jp

投稿受付2019年8月29日、掲載決定2019年10月15日

ISSN 0388-1601 Copyright:©2019 the Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics (JSCPT)



Photo. 1 地方会会場



Photo. 2 講演会会場風景

の治療法確立に一貫して取り組まれており、ALS（筋萎縮性側索硬化症）も重要な対象疾患である。米国で筋電図のトレーニングを受けて京都大学に帰国された際の多巣性運動ニューロパチーの治療法に関する報告がもとで膨大な数のALS患者を診ることになったこと、進行を遅らせる治療法として大量のメチルコバラミン（ビタミンB12の誘導体；エーザイからメチコバル®として発売）の注射の臨床研究を始めたこと、その後企業治験が始まったが残念ながら中止になったことなどを紹介された。サブグループ解析の結果をもとに粘り強くAMEDに医師主導治験事業を申請し、採択になったものの治験期間、費用の面でだれもが研究代表医師が死亡する「医師死亡治験」といわれた、ということが講演タイトルの意味であった。苦難を乗り越えて症例登録がほぼ完遂の時期であり、座長の梅本誠治教授（広島大学）のリードで会場からも活発な質疑応答があった。

3. シンポジウム

シンポジウム1「適正な臨床研究推進のために」の座長は鳥田美樹（鳥取大学）、武智研志（徳島大学）の両氏にお願いした。近藤智子氏（山口大学）からは、豊富なご経験、山口大学での取り組みをもとに、研究者を支援する側は、研究者の臨床研究に対する熱意を感じつつも、時に研究者の横に立って歩幅を合わせ、時に研究者の後ろに立って支える、「研究者とともに歩む」ことが重要と考えるというメッセージをいただいた。各研究施設で研究倫理に関する相談対応が求められる状況にあって、中馬真幸氏（徳島大学）からは、基礎研究、臨床研究を実施し、現在研究倫理を含めた研究者相談に対応している立場から研究コンサルタント育成を一つの目標としたAMED松井班への参加経験と今後への展望についての紹介があった。伊吹友秀氏（東京理科大学）は、わが国でも研究公正に対する関心が今まで以上に高まっているなか、研究におけるねつ造、改ざん、盗用の3つの行為、さらに研究の成果である論文の著者に誰がなるべきかに関するオーサーシップをめぐる問題な

ど、国内外の事例を例にとって紹介され、一人一人の研究者はどのようにこれらの研究公正上の問題と向き合っていくべきかについて考える機会をいただいた。

シンポジウム2「種を育てるための体制」は永井将弘（愛媛大学）、丸本芳雄（山口大学）の両氏にご担当いただき、シーズから実用化までの流れの再認識を図っていただいた。実用化には産官学連携体制の構築が必須であるが、研究者にはさらなる啓発が必要な分野である。この観点から、矢野慎一氏（徳島大学）には徳島大学における産官学連携体制（四国TLOの活動も含む）や企業の技術評価ポイントを、具体的な事例と共に紹介いただいた。また、活発な活動をされている鳥取大学から古賀敦朗氏に、鳥取大学医学部附属病院での医療機器人材養成講座「共学講座」、病院内の全診療科・全職種が参加し活発な意見交換を行うシステムの構築、「小さいものからコツコツと」をスローガンとした医療機器クラス2以下の製品開発への注力、さらに「山陰医療福祉機器バレー構想」実現のための活動など、鳥取大学の挑戦の状況を紹介いただいた。実施機関の立場からは、三邊武彦氏（昭和大学）より8附属病院と4研究所などを併せ持つ医系総合大学である昭和大学のスケールメリットを活かした治験、臨床研究の実施、昭和大学臨床薬理研究所の活動、さらに2019年4月に開所した昭和大学薬理科学研究センターによる研究活動の活発化などをお示しいただき、櫻井淳氏（岡山大学）からは、アカデミアが行う社会貢献活動の一つとして、研究や診療で得られた新しい技術や薬を世の中で早く使っていただけるような社会実装の重要性と、その実現のための心構えや、研究開発におけるアカデミアを取り巻く大きな流れの解説があった。最後に指定発言として、日本臨床薬理学会と関係の深い公益財団法人臨床薬理研究振興財団の活動について、金田豊正氏に紹介いただいた。

4. 一般演題ポスター発表

2つのシンポジウム間にポスターセッションを設定し、「種を育てる」にはそれぞれのステップにおける現実的



Photo. 3 一般演題ポスター発表会場風景

な取り組みが不可欠であることから、CRC などの方々からの日常の業務に直結するような演題を含めた応募を呼び掛けた。ポスター発表は会員以外でも可能とし（ただし共同演者に会員は必要）、試みとして、「優秀演題賞」を設定し、会員以外の方の参加や受賞を契機とした入会促進を図った。幸い、いわゆる臨床薬理的な演題、臨床研究のシステム構築に関する演題など幅広い内容で 10 題のご応募をいただいたが、筆頭演者が会員以外の演題は 1 題のみであり、会員以外の参加の促進には直結しなかった。

優秀演題賞選考に関しては当日参加した日本臨床薬理学会中国・四国支部世話人により投票を行い、次期地方会会長の梅本誠治教授（広島大学）の立ち合いのうえ、地方会会長が事務局の担当者と共に開票し、採点の上位 2 名を優秀演題賞に選考した。優秀演題賞受賞者は、出石恭久氏（独立行政法人国立病院機構岡山医療センター臨床研究部、Edoxaban を用いた全人工膝関節置換術施術後の静脈血栓塞栓症予防による術後貧血に影響を与えるリスク因子の検討）、合田光寛氏（徳島大学病院薬剤部、医療ビッグデータを活用したシスプラチン誘発腎障害に対する新規予防薬の探索とその有効性の検証）であった。

5. 運営に関して

中国・四国地方支部は会員数が約 180 名と会員数が一番少ない支部である。参加者も実際多くを期待できず予算も



Photo. 4 優秀演題賞受賞者と地方会会長

限られていることから、担当決定後、会長の楊河宏章と所属施設である徳島大学病院臨床試験管理センターの武智研志、中馬真幸の 3 名が主になって、あえて手作りの会として運営することとした。講演をご担当いただいた先生方、ご参加の皆様には何かと不自由があったものと考えているが本稿をお借りして改めてご容赦をお願いする次第である。

企画に関しては中国・四国地方支部事務局長である永井将弘教授（愛媛大学）のご支援が大きい。前回の地方会の際に概要の相談をさせていただき、それ以降も地方会の詳細についての、日本臨床薬理学会中国・四国地方支部のホームページ（<http://jscpt-cs.jp/>）掲載をはじめ折に触れてご指導をいただけることがなければ開催は困難であったと考える。運営としては、会場は学内会場を使用、ランチオンセミナーは企画せず、協賛の依頼もホームページ上で応募を受け付けている企業への申し込みとした。諸事情厳しい中、4 社から協賛のご理解をいただけてありがたく思っている。参加者数は 84 名（日本臨床薬理学会員 44 名、非会員 40 名）であった。

第 5 回日本臨床薬理学会中国・四国地方会は、梅本誠治教授（広島大学）を会長として 2020 年（令和 2 年）6 月 20 日（土）、TKP ガーデンシティ PREMIUM 広島駅前にて開催されると伺っている。今後も情報交換などにより、中国・四国支部の発展を図っていきいたいと考える。